

# 高知大学 病院 ニュース

〔編集〕

高知大学病院ニュース

編集委員会

委員長 花崎 和弘

〔発行人〕

高知大学医学部附属病院

病院長 杉浦 哲朗

## 30周年記念事業を終えて

高知大学医学部附属病院長 杉浦 哲朗

**高**知大学医学部附属病院開院30周年を祝う記念式典・講演会・祝賀会が10月15日高知新阪急ホテルで行われました。準備に大変多くの時間を割いていただいた職員の皆様、ご多用にもかかわらずご出席いただいた皆様のご協力・ご支援により盛会のうちに終了することができましたことを厚くお礼申し上げます。

記念式典には、来賓、医療関係者200名と大学職員200名の400名にもものぼる方々に出席していただきました。脇口宏医学部長からは「地域に根差した大学病院として県民の信頼を得られるよう邁進する」との致辞があり、相良祐輔学長からは開院以来地域と密接な関係を持った附属病院30年のあゆみをお話しいただき、「今後も地域に根差した大学病院として安全な医療・福祉環境を築いていく」とのご挨拶がありました。続いて、奈良人司文部科学省審議官(高等教育担当)、尾崎正直高知県知事、永野健五郎高知県医師会長から丁寧な祝辞をいただき、祝電も披露されました。

講演会には一般市民の方が66名参加され、第一部の講演会では高知医科大学一期生が講師となり、東京大学工学系研究科の柳衛宏宣特任准教授による「集学的癌治療に向けたトランスレーショナルリサーチの展開～中性子捕捉療法を中心として～」及び高知赤十字病院の西山謹吾救命救急センター長による「大規模災害と医療機関」の講演が行われました。第二部の記念講演会では相良祐輔学長が「文明としての医学 文化としての医療学」と題した講演をされ、「文明としての第一の火、第二の火(原子力)を人類が手にし文明が萌芽したが、これは自らを滅亡しうることでもある。医学も同じように遺伝子操作というプロメテウスの火を手に入れた」ことに触れられ、「科学は単なる技術の追求であってはならない」ということと「人の心に寄り添う医療」の大切さを強調され講演を締めくくられました。

\*\*\*

**会**場を移して開催された記念祝賀会では、300名以上の方々にご参加いただき、中谷元衆議院議員及び橋詰壽人南国市長から祝辞をいただきました。そして、総勢24名での鏡開きに続き池田久男元高知医科

大学長の発声により乾杯が行われ、医学生から成る管弦楽団の演奏をバックに医学部附属病院開院30周年が盛大に祝われました。

\*\*\*

**本**院は、昭和56年4月に高知医科大学附属病院として設置され、同年10月19日より診療を開始いたしました。以後30年にわたり大学病院として質の高い医療を提供すると共に、人間味豊かな良医の育成、そして医学研究の成果を医療に還元するという使命を持って診療・教育・研究に取り組んでまいりました。この間、「地域から頼られる病院」として医療の充実を図ってまいりましたが、歩んできた軌跡は必ずしも平坦な道ばかりではありませんでした。特に、平成15年の高知大学との統合、平成16年の国立大学法人化、そして平成16年からの臨床研修制度開始とその都度自己改革を行い苦難を乗り越えてまいりました。そして、30周年を迎える年に、高知大学医学部の悲願であった附属病院のイノベーションが認められるという非常にうれしいニュースが届きました。本計画の基本理念は、「地域に密着した先端医療の推進と高度医療人の育成」です。附属病院のイノベーションは医学部とも連動しており、特に先端医療学推進センターが中心となって進めるトランスレーショナルリサーチと異年次教育は、地域の枠を超えて我が国の医療、医学教育にも貢献するものと期待されます。

\*\*\*

**30**周年を迎えました当院は、次なる30年に向かい職員一丸となって医療の質と安全の確保に努めると共に、地域の医療ネットワークの更なる充実を図り、県の掲げる「日本一の健康長寿県」構想をサポートし、社会の期待に応えるべく邁進していきたいと考えております。高知大学医学部附属病院が地域に根差す大学病院として県民の皆様から更に厚い信頼をいただけるよう人間味あふれる良質な「care」と「cure」を実践していきたいと願っておりますので、今後とも職員の皆様のご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

# 高知大学医学部附属病院開院30周年記念行事

## 式典

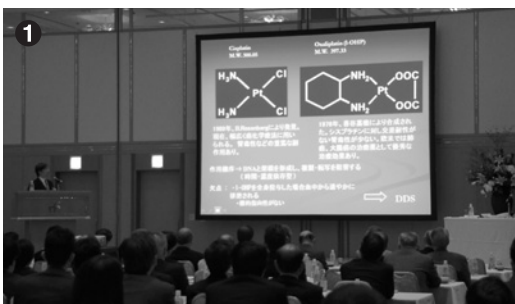


相良祐輔学長からの挨拶



尾崎正直高知県知事からの挨拶

## 講演会



① 東京大学工学系研究科柳衛宏宣准教授の講演 ② 高知赤十字病院 西山謹吾救命救急センター長の講演  
③④ 相良祐輔学長の記念講演

## 祝賀会



① 杉浦哲朗附属病院長による挨拶



② 鏡開き  
③ 池田久男元高知医科大学学長による乾杯の挨拶



## 新任の挨拶



寄附講座  
災害・救急医療学講座  
長野 修 特任教授

11月1日付で岡山大学救急医学講座より赴任してまいりました。よろしくお願いいたします。  
当講座は高知県の災害医療、救急医療の発展のために県の寄附講座として新たに設置されました。その目的は、①来るべき南海地震に対する備え、②卒前卒後教育における災害・救急医療教育の充実、③附属病院における救急診療の拡充、④救急医の養成と地域医療への貢献、などです。南海地震発災時には、高知市内の救命救急センターが機能不全に陥る可能性が高く、当院の役割は非常に大きくなります。震災の急性期には、DMAT(災害派遣医療チーム)を受け入れ、広域医療搬送拠点(Staging Care Unit:SCU)として機能しなくてはなりません。このような役割を果たすためには、日常的な救急診療の拡充が不可欠となります。院内関連各科、各部署のご理解とご協力をお願い申し上げます。

個人的には、麻酔・集中治療を経験したのち、救急医療に携わってきました。当講座の使命と責任の大きさを思うと身が引き締まる思いですが、県民の安心・安全に貢献すべく全力で取り組んで参ります。

## 平成23年度医学教育等関係業務功労者表彰を受賞しました

文部科学大臣は、毎年医学又は歯学に関する教育・研究もしくは患者診療等の補助的業務に関し、顕著な功労のあった者を表彰しています。

平成23年度も、この表彰式が11月24日に東京で行われ、本院の受賞者である検査部 西原えり子さん(副技師長)と薬剤部 見元尚さん(薬剤主任)両名に表彰状及び副賞が贈呈されました。

杉浦病院長とともに相良学長に受賞の報告をする両氏▶



## 受賞の報告



メディカルサブライセンター  
ME 機器管理室  
村上 武  
(臨床工学技士)

学会名: 第45回四国透析療法研究会

演題名: カオリナイト系粒状セラミックス処理水を利用した透析システム清浄化の試み

受賞名: 四国透析療法研究会学術奨励賞

今回、歴史ある会で優秀賞を受賞できたことを大変嬉しく思っております。

今回の受賞は、常日頃よりご協力を賜っている検査部、透析部、臨床試験センターの熊谷先生、また関係するスタッフの方々のご尽力あっての成果だと改めて実感している次第です。ご支援頂きました皆様に心よりお礼を申し上げます。本研究はまだまだ継続中であり、今回の受賞を励みに、これからも更なる上を目指して邁進していきたいと思っております。

## 永年勤続表彰

今年も永年勤続の表彰式が11月22日(火)に朝倉キャンパスで行われました。

岡豊キャンパスからは次の11名の方が表彰されました。

写真前列左から(敬称略)

森田靖代(薬剤部)、北村真紀(看護部)、  
宮井千恵(看護部長)、堅田修子(看護部)、坂本佳代(看護部)、

写真後列左から

山田正人(総務企画課)、筒井敏子(看護部)、  
恒石珠美(看護部)、土居三枝(看護部)、濱渦和(看護部)、  
浪上健一(会計課施設管理室)、久川清仁(総合研究センター)

20年間お疲れさまでした。今後ともよろしくお願いいたします。



## 職場紹介 輸血部

**輸** 血部は、部長(杉浦哲朗教授)、専任副部長(今村潤講師)、専任技師(西原えり子副技師長)、技師2名(西満子技師・津野晃正技師)、看護師1名(西岡裕子看護師)という小さな部門です。24時間の輸血検査・払い出しに対応するため、日当直は検査部と協同で実施しています。

**輸** 血部は1981年に検査部の輸血検査部門として始まり、1988年に独立し輸血部となりました。当初より24時間体制で輸血製剤の一元管理と払い出しを実施しています。1990年代から「細胞治療」や自己血輸血の普及に取り組みました。2007年には輸血オーダリングを実現しました。

**現** 在は、本院全体の年間2万5千単位に上る輸血製剤の安全確実な管理・払い出しに当たっています。また年間800単位前後の自己血輸血の採血や保存管理を実施し、手術時の赤血球輸血の25%以上が自己血でまかなわれています。さらに骨髄移植・末梢血幹細胞移植、血管新生療法などの「細胞治療」に関与し、年間50件前後実施

しています。また輸血部医師による毎日の輸血回診、輸血後状態連絡票、輸血バッグの全数回収保存など、輸血副作用の把握とその予防および治療に協力しています。

**ま** た「輸血・細胞治療委員会」の開催により適正輸血検証と啓発を図り、本年3月には本院は輸血管理料I※1の認定を取得しました。また本年6月には骨髄バンクの「非血縁者間末梢血幹細胞採取認定施設※2」に認定されました。さらに「高知県輸血・細胞治療研究会」を主催し本県の輸血医療の充実と適正化を図る活動も続けています。

**本** 年度中にクリーンルームの運用を開始し「細胞プロセッシング」を行う体制が整います。今後は先進的治療の研究・臨床応用への協力と関与を更に進め「輸血・細胞治療センター」の設置を目指します。

**こ** のように輸血部は「輸血・細胞治療部門」として充実しています。今後もさらに発展を図り、本院および本県の輸血治療に一層寄与できるよう力を尽くす所存です。

(文責:今村 潤)



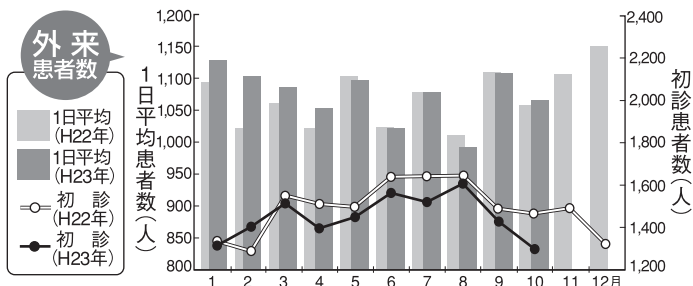
輸血部長杉浦 哲朗



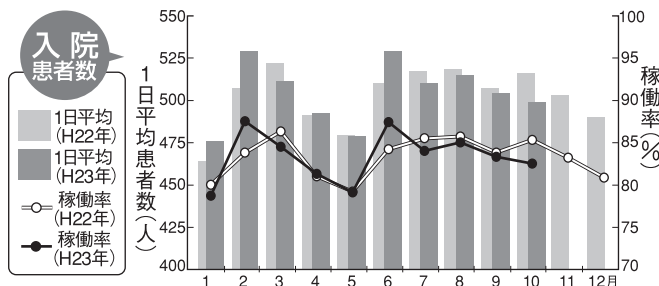
※1: 輸血医療の質についての評価基準であり、厚生労働省により医療機関における輸血管理体制の構築と輸血の適正な実施について審査され認定される。輸血管理料Iの認定を受けた医療機関で血液製剤の輸注を行った場合に、月1回を限度として1件あたり200点が算定される。輸血管理料認定はその医療機関における輸血医療の質が高いこと、ひいては診療全体の質が高いことを示す指標と言える。

※2: 昨年末、骨髄移植財団により日本でも骨髄バンクドナーからの幹細胞提供に末梢血幹細胞を用いることが承認された。その採取施設の認定には骨髄バンクにより体制、施設の充実、移植の実績、末梢血幹細胞採取の経験などの条件が審査される。この認定は、その医療機関が移植医療の中心的施設であることの証左であり、やはり高い医療の質の指標となる。

## 診療状況



9月と10月の1日平均外来患者数は前年同月とほぼ同等。初診患者数は減少傾向。



10月の1日平均入院患者数が昨年同月に比べ大きく減少(17名)。稼働率も2.8%の減少。

## 編集後記

先日、10月15日に高知大学医学部附属病院開院30周年記念式典・講演会が行われました。1981年10月に高知医科大学(現高知大学)医学部附属病院として診療が開始され、はや30年が経ったこととなります。柳衛先生、西山先生、相良学長からご講演をいただき、医学の進歩、医療の精神について思いを新たにしました。ご出席の先生方の姿にも過去の高知大学(高知医大も含め)の思い出、ひとえに30年と言っても非常に長い歴史を感じました。

「30年とはいったいどのくらいの長さなのか」と考えてみると、巷では「今後30年以内に40%の確率で南海大地震が起きる」「原発事故での放射性物質の福島県内中間貯蔵施設での貯蔵期間30年」といったニュースに30年という数字が使われています。過去を振り返るとあっという間かもしれませんが、未来に向かっての30年は途方もなく長い道のりのように思えてくるのは私だけでしょうか。

30年後の医学・医療はどのように変わっているのか、想像するだけでワクワクしてきます。

(文責:小栗 啓哉)